三田市事務報告の「図書館主要運営指標」を読む

今年も暑いあつい夏でした。酷暑の中、私たちは地道に活動を続けております。その中で、またまた“発見”がありました。それは最近発表された**「平成３０年度三田市事務報告」の図書館関連データ**です。図書館関連の数値を点検してみたところ、すぐに幾つかの疑問が生じました。三田市の図書館データは何故こんなにクェッションだらけなのでしょうか。「真夏の夜の悪夢」をみる思いです。市民の皆さんに早速お知らせしなければと勇み立ったものの、この酷暑の折、楽しくもない報告をお読みいただくのは如何なものかと考え直し、秋風の立つ季節を待っておりました。そんなことで、ホームページの更新にかなり間が空いてしまいました。ご容赦ください。

図書館の運営指標(平成 30 年度三田市事務報告からの抜粋)

ウ　主要運営指標（全館）※貸出人数・点数は、団体・相互貸出を含む

事　項	平成 30 年度	平成 29 年度
入館者数	710,021 人	725,047 人
貸出人数	301,417 人	302,571 人
貸出点数	1,042,306 点	1,075,041 点
資料費総額（資料購入費）	26,074,770 円	25,979,817 円
開館時間 (a)	10,310 時間	10,367 時間
図書館費 (b)	262,386,534 円	261,376,520 円
開館コスト (b)/(a)	25,449.7 円/時間	25,212.4 円/時間

ホームページ再開のトップには、７月半ばに届いた三田市文化スポーツ課の「再回答書の分析」を予定していましたが、直近の「事務報告」の分析から始めることにしたいと思います。

右の表**「図書館の運営指標」**は、事務報告から抜粋したものです。わたしたちは、図書館がＴＲＣの指定管理になって以降の図書館年報を分析し、三田市・図書館へ何度か質問をしてきました。その最終回答を７月中旬に受け取っています。そして、その回答を検証するため、平成３０年度図書館年報の公表を待っています。しかし、未だに公表されていません。

そこで、とりあえず事務報告として発表された**図書館の「主要運営指標」**について考えみたいと思います。発表されたのは２年分のデータだけなので、それに市直営最終年・平成２５年度以降のデータを付け加え、６年間の比較表を市民の会が独自に作ってみました。それが次ページに掲げた表です。

まず「事務報告」の図書館主要指標の数値（１ページの表）から見ていきます。３０年度のデータについては、年報が未公表で検証の術がありません。そこで、２９年度のデータを前年の事務報告と比較してみました。当然のことですが、本来なら今年も昨年も同一でなければなりません。それなのに、数値の違うところが２か所ありました。

貸出人数と貸出点数を別の基準で計算していた　一つは**「貸出人数」**です。今年のものは３０万２５７１人となっていますが、昨年の表には３０万２０１９人と書かれています。５５２人増えています。しかし、こうなった理由は理解できます。今年の事務報告から**「貸出人数・点数は、団体・相互貸出を含む」**という注書きが入っています。つまり、昨年のものには「団体・相互貸出は含まれていなかった」ので、今年はそれを含めた数値に改めた、ということなのです。この数値は年報データとも整合しています。良しとしましょう。ところが一方、その下に掲載されている**「貸出点数」**の数値は、今年も昨年もまったく同じです。この項目はすでに昨年から、「団体・相互貸出を含めた数値」に変えられていたのです。つまり昨年は、同じ「図書貸出の数値」なのに、「人数」と「点数」を違う基準で計算していたのです。何か意図があってのことなのか、無知による単純ミスなのか分かりません。この点については、わたしたちが早くから数値の齟齬を指摘していました。無視できなくなって今年から体裁を整え、「注書き」も入れた、というのが実情だと認識しています。

従来、こられの数値はすべて、「団体・相互貸出を含めず」に計算していたのですが、ある時点から、「団体・相互貸出を含める」方式にこっそり変更し、結果的に数字を水増しする形になっていたのです。変更されたのは表の**（注＊①）**にも書きましたが、指定管理２年目の２７年度だと推定されます。

では何故、このように貸出数値に「団体・相互貸出を含める」ことにしたのでしょうか。この点については後述します。

２９年度の資料費総額が何故か変わっている　もう１か所、違っていたのは**「資料費総額」**です。書籍や雑誌などにどれくらいお金を支出したかという大事なデータです。この金額は、昨年発表の事務報告では２５６５万６３５６円と書かれています。これは同年度の図書館年報にある数値と同じです。しかし、今年の事務報告を見てください。

２５９７万９８１７円と、３２万３０００円余り多くなっています。

この年のデータについては、実は前段があります。事務報告には載っていませんが、図書館データの細かい項目に**「資料費最低基準額」**というのがあります。これは、最低でもこれだけのお金を資料購入に使いなさい、と指定管理者に指示した数字です。

一方、**「実績額」**という項目があります。これは当然のこと、実際に購入した金額です。２９年度はこの二つの金額が２２８６万１７４０円と、まったく同額になっていたのです。「指示された金額と１０円単位まで同額の資料を購入した」なんてことはまず考えられません。そこで、三田市文化スポーツ課に問い合わせたのです。細かいやり取りは省きますが、文化スポーツ課は間違いを認めました。その際に、＜実は**「資料費総額」**も間違っていました。正しくは２５９７万９８１７円です。＞と回答してきたのです。但し、年報の数値が何故間違ったのか、「２５９７万９８１７円」がどのように算出された数値なのか、などについては一切述べられていませんでした。

三田市とのやり取りの中でこういうことがしょっちゅうあります。公表されている数値を事も無げに変えて平気なのです。今回も２９年度版図書館年報の誤りを正式に訂正するのではなく、事務報告の数値を直すだけで「訂正代わり」にした、ということでしょうか。資料費という大事なデータを、もっと言えば施策の基礎をなす統計を、本当に事も無げに扱っています。三田市はこうしたデータの間違いについては極めて無神経で、**＜それがどうかしましたか。訂正なんか必要ありませんよ＞**と再回答書であからさまに述べています。＜市民生活にはなんの影響もないでしょう¡?＞というのが文化スポーツ課の姿勢です。市職員の職業倫理はどこへ行ったのでしょうか。この点については、「再回答書」の分析の際に、詳しく述べたいと考えています。

図書館の主要運営指標(全館)（貸出人数・点数には団体・相互貸出を加算している）＜市民の会作成＞

事項	平成 30 年度	平成 29 年度	平成 28 年度	平成 27 年度	平成 26 年度	平成 25 年度
入館者数	710,021 人	725,047 人	751,032 人	787,260 人	728,606 人	----------
貸出人数	301,417 人	302,571 人	301,884 人	317,059 人	324,618 人	282,628 人
貸出点数	1,042,306 点	1,075,041 点	1,073,529 点	1,100,237 点	1,144,128 点＊	1,111,280 点
資料費総額 (資料購入費)	26,074,770 円	25,979,817 円	25,898,941 円	28,160,938 円	25,654,598 円	22,157,280 円
開館時間(a)	10,310 時間	10,367 時間	★10,202 時間	11,052 時間	11,052 時間	5253.5 時間
図書館費(b)	262,386,534 円	261,376,520 円	296,799,428 円	269,125,166 円	295,358,266 円	287,146,768 円
開館コスト(b)/ (a)	25,449.7 円	25,212.4 円	★29,092.2 円	24,350.8 円	26,724.4 円	54,658.1 円

(注)＊①＝平成 28 年度以前の「貸出人数」「貸出点数」の数値は、平成 30 年度の事務報告に合わせて「団体・相互貸出数」を加算して算出した。この数値は、27 年度・28 年度については、三田市が主張するように、図書館年報の「④年齢区分別貸出状況」の合計と一致する。しかし、26 年度は一致しない。26 年度の「④年齢区分別貸出状況」は 1,130,175 点で「①概況」の貸出点数と全く同数になっている。つまり、ここには「団体貸出点数」が含まれていないことが分かる。このことによって積算方法の変更が 27 年度に行われたことが明らかになった。これらの詳細については三田市文化スポーツ課の回答書の分析の際に改めて触れたい。

＊②＝開館時間(a)が、平成 26 年度、27 年度、28 年度はまったく同じである。別表＜3 年間の「開館コストがまったく同額」＞として、図書館年報の「①年間実績(指標)」「(16)開館コスト」を３年分並べたものを掲載する。
＊③＝上記②の「(16)開館コスト」は、平成 26 年度、27 年度、28 年度の数値がまったく同一である。しかし、「3 館の総開館時間」はここにしか記載されておらず、館別の開館時間データなどは年報に存在しない。従って真偽の確認方法がない。一方、人件費については各年報の「図書館運営費の決算額」に明記されている。それを、「図書館人件費」として別表で掲載している。
＊④＝「開館コスト」の 29・30 年度以外は市民の会が計算した数値。但し、ピンク表示の 26・27 年度は開館時間が全く同一になっており、どちらかが間違っている可能性が高い。28 年度の開館時間も年報では 26・27 年度と同じだったが、事務報告からより確度の高い数値(★)を入手したので、それに基づいて開館コスト(★)を計算している。

では次に、３０年度事務報告に合わせて私たちが作った６年間の比較表（前ページ）の数値を見て行きましょう。平成２５年度が直営最後の年です。

「目玉の入館者数」の減少が止まらない　まず、**「入館者数」**。このデータは指定管理者制度の図書館になってから採用されたデータです。従って直営時代のデータはありません。ＴＲＣの運営が始まった２６年度は７２万８０００人余りです。この時、三田市は**「過去のデータはないが、直営時代からほぼ倍増した」**と述べていました。データがないのに倍増とは、一体何を根拠に、と誰もが思いますが、指定管理者制度採用の成果として、そう断言した当時の担当課長の“したり顔”を思い出します。開館時間が直営時代と比べてほぼ“倍増した”のですから、入館者も倍増はともかく大きく増えなければ何のための開館時間増か、ということになります。来館者は増えて当然と言わなければなりません。そして、翌年はさらに６万人ほど入館者が増えました。ところがどうしたことでしょう。翌２８年度からは一転、減少に転じています。そして、２９年度には指定管理スタートの年を下回り、次の３０年度には１万５０００人以上も減ってしまったのです。入館者数は指定管理者制度を評価するための「目玉データ」だったのに、こうしたお寒い状況になっています。入館者数が“増えた”原因としては、開館時間の延長・拡大の他に、図書館の施設を中学生高校生の「勉強部屋」として自由に使えるようにしたこと、勉強スペースを広げたことも大きな要因でした。そのことは、逆に一般利用者の使い難さにつながっているのかもしれません。また、図書館の勉強部屋化については、図書館本来の役割を重視した根強い批判があります。それに多くの生徒たちは、図書館に通っているのに「まったく本に親しまない」という皮肉な現象を現出しているのです。入館者数の「止まらない減少」から、そんなことも考えさせられます。

貸出点数は直営時代より年間７万冊も減った　次は**「貸出人数」**です。これも平成２６年度に４万人強増えたあと、翌年からはもう減少に転じています。２９年度には一旦、下げ止まったかのように見えましたが、３０年度はまたわずかながらマイナスになりました。元々、開館時間延長・拡大の理由には、直営時代の開館時間では利用できない人（例えば働いて

いて帰宅時間の遅い人など）が多くいるということが挙げられていました。利便性の向上でそれらの人たちが必ず図書館を利用するようになる、と強調されました。一方で、新規利用者を喚起する誘因にはなり得ず、従来の利用者の来館時間が拡散するだけ、という指摘もありました。どちらが正しかったのでしょうか。魅力の無い図書館に本を愛する人は集まりません。むしろ遠ざかって行きます。貸出人数が直営時代の水準以下に落ち込むのは時間の問題かもしれません。

驚くのは**「貸出点数」**です。こちらも直営時代の１１１万冊から、指定管理初年度には１１４万冊と３万冊以上増えました。ところがすぐに劇的反転が始まりました。翌２７年度には１１０万冊と前年比で３万冊以上、直営最後の年に比べても１万冊以上減ってしまったのです。そして、３０年度には直営時より７万冊以上も減ってしまいました。開館時間が大幅に増え、入館者が“倍増”したのに貸出人数と貸出点数は徐々に減っている。図書館は俗な言い方をすれば、「借りてもらってなんぼ」の世界です。いくら人が集まっても、本を借りてもらえない図書館では意味がありません。三田の場合は「本を借りるために」、また「本を通じての何かを求めて」図書館に来ていた人たちが、逃げ出し始めているのではないかという印象を受けます。その象徴が貸出点数の激減ではないのでしょうか。それに加えて「集まる人」までが減り続けているのです。

こうした現象を少しでも取り繕おうとしたのが、前述の貸出データに「団体・相互貸出を含めて計算する」手法だったのではないかとわたしたちは推測しています。従来は除外していた団体貸出を加えれば、例えわずかでも減り幅を抑えられる、そんな思惑で始まったことなのでしょう。しかし、誰かが思いつきでやったことだったのでしょうか、Ａのデータには加算したが、Ｂのデータには加算を忘れた、そういう混乱が起きた上にデータの一貫性までが失われてしまった――私たちはそう認識しています。なんとも姑息なことです。

次は**「資料費総額」**です。勿論のこと、本や雑誌を中心とする図書館資料を購入したお金です。このお金の額が直営時をやや上回る水準で維持されていることは評価します。書籍単価の高騰がありますから金額が増えたからといって、購入点数が増えているとは言えないかもしれませんが、図書館としての最低限の水準はまだ守られていると受け止めています。しかし、貸出点数の減少をみると、果たして購入する資料の内容が利用者市民の希望と合致しているのか、市民の要望が正しく汲み上げられているのか、という疑問は残ります。それは、私たちが再三取り上げてきた選書方法の不備、選書担当者の能力の拙劣さが関わっているのではないかという疑念はぬぐえません。

もう一つ気になるのは、表には項目がありませんが、雑誌などの逐次刊行物の購入額が、直営時と比べて随分増えていることです。これは何を意味するのでしょうか。いつか分析してみたいと思います。

開館時間と人件費が３年間同じ!! だから開館コストも３年変わらぬ

さて、問題は**「開館コスト」**です。注記にも書きましたが、市立図書館３館・室の総開館時間のデータは、図書館年報の「①年間実績(指標)」「(16)開館コスト」にしか記載されていません。この数値が２６年度から２８年度までまったく同じであることが今回、事務報告チェックのため年報を再点検していて判明しました。右に掲げた比較表**「３年間の開館コストが全く同じ」**を見てください。この表は、私たちが図書館年報から部分コピーしたものです。年度の違いが分かるように「(15)市民一人当たりのサービス効果」の部分も入れています。人口の違いで年度の違うデータであることが分かっていただけると思います。

この表で分かる通り、**「開館時間」**だけでなく**「人件費」**も３年間全く変動がありません。**「指定管理料」**が同額なのはそう定められていて当然なのですが、開館時間と人件費が３年にわたって同じ、などということは信じ難いことです。そのために、「開館コスト」の**「開館１時間当たり指定管理料」「開館１時間**

３年間の「開館コスト」がまったく同額

H26年度

(15)市民1人当りのサービス効果

12,740円

＊三田市に図書館が無く、市民1人ひとりが本を購入したと仮定して、図書館の貸出サービスを金額に換算したものです。

資料平均単価（1,615円）× 市民貸出点数（1,062,431点）－ 図書館費（259,816,830円）
人　口（114,289人）

(16)開館コスト

3館の総開館時間:11,052時間＝a　指定管理料:259,190千円＝b　うち人件費:127,350千円＝c

①開館1時間あたり指定管理料(b/a)＝23.5千円　②開館1時間あたり人件費(c/a)＝11.5千円

※ 3館＝本館＋分館＋分室。移動図書館は除く

H27年度

(15)市民1人当りのサービス効果

13,230円

＊三田市に図書館が無く、市民1人ひとりが本を購入したと仮定して、図書館の貸出サービスを金額に換算したものです。

資料平均単価（1,715円）× 市民貸出点数（1,027,364点）－ 図書館費（259,734,952円）
人　口（113,541人）

(16)開館コスト

3館の総開館時間:11,052時間＝a　指定管理料:259,190千円＝b　うち人件費:127,350千円＝c

①開館1時間あたり指定管理料(b/a)＝23.5千円　②開館1時間あたり人件費(c/a)＝11.5千円

※ 3館＝本館＋分館＋分室。移動図書館は除く

H28年度

(15)市民1人当りのサービス効果

11,628円

＊三田市に図書館が無く、市民1人ひとりが本を購入したと仮定して、図書館の貸出サービスを金額に換算したものです。

資料平均単価（1,597円）× 市民貸出点数（987,953点）－ 図書館費（259,740,856円）
人　口（113,309人）

(16)開館コスト

3館の総開館時間:11,052時間＝a　指定管理料:259,190千円＝b　うち人件費:127,350千円＝c

①開館1時間あたり指定管理料(b/a)＝23.5千円　②開館1時間あたり人件費(c/a)＝11.5千円

※ 3館＝本館＋分館＋分室。移動図書館は除く

当たり人件費」が、３年続いてまったく同じという珍現象が生じています。常識ではこんなことはあり得ません。そう考えて調べてみたら、案の定、人件費は、右の小さな表のように毎年度違っています。つまり、平成２６年度の１億２７３５万９５円をそのまま２７、２８年度にコピーして使っていたのです。

となると、開館時間が同一なのも恐らく同様のことなのでしょう。１１，０５２時間というのは２６年度のデータなのだと考えられます。この点、昨年の事務報告（前記）で２８年度の開館時間は１０，２０２時間であることが判明しました。実際には８５０時間も少なかったのです。やはり、ＴＲＣ図書館は初歩的な作業ミスをしていました。そして、個々のデータをコピーして使ったというよりは、この「(16)開館コスト」表全体をコピーして次年度も、その翌年度も使ったというのが真実なのではないかと推察されます。こんなにも杜撰なことが、肝心要のコストというデータで行われ、それが３年間も見逃されていたのです。

図書館人件費	
平成 30 年度	
平成 29 年度	136,397,036 円
平成 28 年度	133,047,736 円
平成 27 年度	129,877,656 円
平成 26 年度	127,350,095 円
平成 25 年度	201,835,227 円

実際の開館コストはずっと高くなる　事務報告の「開館コスト」は分子が「図書館費」の総額です。一方、年報の「(16)開館コスト」の分子は「指定管理料」です。したがって、そのままの比較はできませんが、分母の「開館時間」に“イエローランプ”が点滅し出すと、事務報告まで疑いたくなります。まして、２８年度については分母である開館時間が実際にはお大幅に少なかったのです。正しい数値で計算すると開館コストは跳ね上がります。２８年度年報では**「開館１時間当たり指定管理料」**は**２万３５００円**とされていますが、実際には**２万５４００円**と２０００円近く増えます。“時給で２０００円”は馬鹿にできませんね。また、同様に**「開館１時間当たり人件費」**は**１万１５００円**から**１万３０４０円**に。１５００円も高くなります。こうなると、意図的にコストを安く見せようとした、と疑われても仕方ありません。因みに、わたしたちが計算した図書館費総額による「開館コスト」を★印とピンクで表示しています。しかし、これも黄表示の「開館時間」に疑問がある訳ですから、参考データの域を出ませんが……。

総開館時間が当初より６８５～８５０時間も減っている？！　最後にもう一つ気になるデータがあります。６年間の数値を並べてみて、指定管理“目玉商品”である**「総開館時間」**が、２８年度から大幅に減っていることが分かります。２７年度の開館時間は不確かなものですから、あるいは、この現象は２７年度から始まったのかもしれません。いずれにしても、指定管理初年度からみると２８年度は年間８５０時間、２９年度は６８５時間、３０年度は７４２時間も少なくなっています。各館の開館時間に変更はありません。本館とウッディタウン分館が９時～２０時、藍分室が１０時～１８時。分館と分室が

毎月１回、市民センター休館日に合わせて休むこと、それに特別整理期間を含めた休館の条件も一切変わっていません。それなのにどうして、年間で６００時間以上も総開館時間が減るのでしょうか。気象警報の発令などによる臨時休館が増えた？　何が原因なのか知りたいものです。

以上のように、単に事務報告のデータを分析しようと始めた作業でしたが、またまた図書館年報のいい加減さが明らかになってしまいました。やはり、**ＴＲＣに図書館運営を任せておくのは心配だね**、というのが私たちの結論です。次回は、図書館年報データを巡る三田市の再回答を分析したいと思っています。それは、今回報告したこと深くつながっていると考えています。

（２０１９年９月８日）